
鍋

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍋

【Zマーク】

Z5029B

【作者名】

Littaly

【あらすじ】

そもそもあらすじを書かねばならない理由が僕には分からないのであらすじは書かない。自分にとってそれが読むべき文章なのか、そうでないのかは、最初の数行を読めば分かるはずだからだ。

新聞屋の忘年会の後、一次会をすっぽかして実家に帰つて鍋を食べた。

テーブルの左に座つた親父が、かつおの茶漬けがどうだと呟く。その横に座つたお袋が、鍋に入れた魚の小骨がどうだと呟く。台所の奥で鍋がぐつぐつしている。

ストーブの前で老いた猫が丸くなつてゐる。

本当に、なんでもないことだけど、家族つていいなつて思った。

うちの実家は基本的に小汚いし、安っぽい感じのものしかないし、そんな安っぽいものが雑然とあちこちに統一感も無く置いてあって、なんていうか見事に絵にならない家だ。

間違つてもドラマや映画のワンシーンにはならない光景だ。

でも、そんな風景の一部になつて、鍋をつつぐ。

ポン酢のすっぱさ。

熱い物を食べると鼻水が出る。

お茶が熱すぎてちょっと舌をやけどする。

帰りに「ミミ捨てを頼まれて、それを抱えて家を出る。

本当に絵にならない、グダグダなワンシーンだ。

でも、俺が一番素直に、シンプルに、気張らずに幸せを感じる瞬間だ。

この街には下町のような人情や暖かさもない。
洗練された街のこじやれた感じもない。

大した娯楽施設もない。

スタイリッシュもなければ、心温まる場面も無い。
ただ、なんとなくぐだぐだした空氣だけが漂つてゐる。

でもここが俺の育つた街で、俺はその「人情」も、「スタイリッシュ
も無い、本当に何もないこの街にしかないものを、ずっと感
じながら25年間を生きてきた。

特筆するほどの人情も、特筆するほど洗練されたものも無かつた
から、特筆するほどでもない心のかすかな温度や、特筆するほどで
もない曖昧なディティールの持ち味に敏感になつたんだと思つ。
俺はこんな自分を嫌いじゃない。
だから幸せだ。

幸せすぎて色んなものに、自然と感謝の念が沸いてくる。
でも幸せすぎて、暖かいストーブの前に立つと、ストーブの温度を
知らない子供が今もこの世界のどこかにいる事を強く感じる。

暖かい家族の風景の一部としてそこに座つていると、家族の温かみ
を知らない子供が今もどこかで孤独を抱いているんだって事を強く
感じる。

なんだか色んな気持ちが沸き起つて泣きたくなる。

こんな夜は誰かがそばにいて、ただ一言「いいのよ」とて言つてくれ
たならホントに泣いちゃうかもしない。

でもそんな夜こそ何故か俺は歌いには行けない。
これ以上満たされようと自分の傲慢さに何かを感じるのかもし
れない。

あるいはそうじやないかもしない。

でも何でかはわかんないけど、こんな夜は一人で寂しい気持ちでいたい。

じゃないと次に「幸せな風景」を見た時、彼等にきちんと感謝の念を抱けない気がする。

全部抱えて幸せになりたい。

それこそ鍋みたいに、あらゆる嬉しさと、あらゆる寂しさと、あらゆるいい部分と、あらゆる悪い部分と、全部放り込んで、ぐつぐつ煮込んで、ぺろりとたいらげちゃいたい。

俺が幸せを感じるその理由は孤独ゆえなのかもしれない。
気張らないで幸せになる方法を模索してる。
気張らないで幸せにする方法を模索してる。

本当の平和なんてそもそも初めっから諦めてる。

俺だってそこまで馬鹿じやない。

色々な事情だつて理解してるつもりだ。

平和を妨げるのは一部の権力者や独裁者でも、どうにもならない「事情」でもない。

皆が本当はそんなもの願つてないからだ。
この国みたいな、優位な位置にある国の人たちは自分達の欲望を満たす事ばかりしか考えない。

世界の何割といわれるほど資源を消費しても、やはつこの国の世

は満たされないと言ひ。

もつともつとつて言ひ。

足りない国はもつともつと足りなくなる。

ちょっとだけ足りない国の事を想像してみてよつて歌つたつて誰もそんな声に耳を傾けない。

自分の「事情」で精一杯と言つ。

これだけ優位な立場にある国の人たちが自分の事情で精一杯なんだ
から、不利な立場にある国の人たちなんていっぱいいどころ
か、完全にアウトだろう。
だから沢山の人がしぬ。

だから永久に平和なんて訪れない。

もう少しだけ、自分より不幸な人の気持ちを想像してみてよつて俺
は歌つた。

ボブデュランも歌つた。

ジョンレノンも歌つた。

でも駄目だつた。

ジョンレノンは死んじやつたし、ボブデュランは諦めた。

多分俺も諦めるべきなんだろうなつて思う。

分かつてるんだ。

どうにも諦めきれず燃え残つた残りかすみたいなものをただ半額処
分品みたいに音に乗せて垂れ流してるだけだ。

平和への「行為」でも「願い」でもない。

ただきつちり諦めがつかないだけ。

惨めなもんだ。

でも、そんな俺だつて俺なりに幸せになつたり幸せにしたりしたい
なつて思うし、その為の努力を俺なりにはしたいなつて思う。

多分俺のこの試みはうまくはいかない。
でもこの際結果はどうだつていい。

俺を愛してくれる人に感謝して、愛を知らない人の為に歌うだけだ。

もつと出来る事はあるのかもしれない。

それが出来ないのは俺の弱さと姑息なんだと思つ。

その事自体に対してもい訳するつもりはない。

俺の器の小ささの表れなんだと思つ。

全面的に俺が悪い。

でもこれが俺。

なんだかどうしたらいいのかもう分からない。
だから俺の試みは多分うまくはいかない。

でも幸せな気持ちだけは知つてる。

家族つて鍋みたい。

鍋よりかつおの茶漬けのほうがいい時もある。
だしをとるために入れた魚の小骨が喉に刺さって嫌な気持ちになつたりする。

普通のポン酢が無くてゆずポンで食べてみたら、風味が損なわれてちょっとがっかりしたりする。

暖かくて、なんか嬉しい気持ちになる。

でもいつかなくなる。

だから生きていつか死ぬ事を本気で覚悟する。

彼等が死ぬ事を、自分が死ぬ事を覚悟する。

そうやって結局明日も生きる。

ただそれだけ。

皆も家族は大事にしたほうがいいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5029b/>

鍋

2011年1月16日06時46分発行